大奥の老女の性格
―政治的な活動を中心として―

具　　知　會*

１．はじめに

大奥は江戸城の将軍家の女性の生活空間で、一般的には将軍の正室と妻妾たちが居住している本丸の大奥を指す。その大奥全てを管理する総監督者が御年奇という職名の老女である。[1]彼等は旗本の娘で自由の意思で幕府所属の官吏になった者である。

本稿は老女の活動と影響力に焦点を合わせ、事務管理の専門職を担当していた老女の性格について述べたい。具体的には江戸城の大奥で勤めている老女に限ってその公的な位置と役割を紹介する。続いて本稿のテーマである老女の政治的な活動について11～12代将軍時期に活躍した大崎と姉小路を中心に分析する。本稿で述べる老女の範囲は、江戸城の大奥で勤ている上臈御年寄を含めて御年寄という職をもっていた者で、同時期に多数だったことを前提にする。

２．先行研究

大奥の研究で老女が浮かび上がったのは比較的最近のことである。大奥がテーマとして研究され始めたのは1892年「千代田城大奥」[2]がその始発点である。その本を補完して1930年に出版されたのが、現在までに大奥の研究の手引きとして使われている三田村鳶漁の「御殿女中」[3]である。本格的な研究が始まったのは1980年代の後半からで、この時期には江戸時代の大奥を総合的に研究する研究書が多数出版された[4]

大奥の研究が再び注目されたのは2000年に至ってからで、大奥の女性たちの自主的な思考と活動に対する研究が行われている。老女の活動を具体的に述べている研究としては竹内誠の「老女の政治力」[5]が挙げられる。ここで竹内は政治史においての大奥と老女の活躍を高く評価している。

３．史料

⑴　一、梅、岡野、失島、川崎、此四人申し渡す儀、相そむくべからず。其外、だれ人によらず、法度之旨申しきかするにおいては、違背いたすべからざる事。[6]

⑵　筑後守（横田準松）御加増之義ハ、初発伺之節五千石と相済候処、老女共より申出、先三千石ニ而も然るべく候、また追って兎も角もと上江も御内々は申し上げ、其筋江も申し談じ候上、三千石二相成り候事。[7]

⑶　人間は飲食の欲、男女の欲と、およそこれらの欲のないものはなく、この欲は避けるに避けがたいものである。（中略）しかるにわれわれ奥向きに勤る者は、そのような男女の欲を断ってお仕え申しております。であれば、幾分のぜいたくがあっても、それは寛大に見て頂けるものと思っておりました。（中略）[8]

⑷　侈りを窮むるには金銭が先きに立つなり、奥女中が如何に華美贅沢を冀望するも、金銭の出所なければ其企望を達する能はざるなり、然る

＊淑明女子大学校大学院院生

に表役人則はち足下の同僚等が此の弊を養成し、我々が求めもせぬ賄賂を頻りに奥向に運び込みて、(中略) 驕奢の源泉は表に在り、(中略)[9]

4．本論

(1) 老女の成立

老女は大奥の制度が決まる過程で生まれ、時代の流れに応じてその位置は徐々に安定していった。老女の存在が言及され始めたのは万治2年（1659）の史料である。[10]以後、寛文10年（1671）の女中法度には＜史料１＞に見えるように四人の女中が大奥の運営者に任命されている。

寛永２年（1643）大奥で絶対的な権力を振るった春日局の死亡以後、乳母の地位は激しく低下したのである。将軍の側室も権力とはあまり関係のない存在で、江戸中期になると側室は女中の職制に引き込まれ、彼等を抜擢することも老女の任務になる。

老女は基本的に大奥のすべてを取り締る者で、大奥女中の人事権も持っていた。また、大名と将軍家の間の儀礼と行事においても公的な位置を占めていて、大奥を代弁する公式文書「女中奉文」を発送した。

(2) 老女の政治的な役割

① 大崎の場合

大奥が幕府の政治に大きな影響力を及ぼしたのは18世紀後半の言わば田沼時代である。大奥はこの時期に政治を主導していた老中田沼意次の出世と深い関係がある。田沼は大奥で積極的に親交政策を広げて女中たちに評判を得た。将軍と親しい生母と老女は田沼にとって自分の政権基盤を固められる重要な支持勢力であったのである。しかし、田沼は家治の薬殺説に巻き込まれて失脚することになる。彼の失脚には老女大崎の活躍があまりにも重要だったためだと思われる。[11]

大崎は田沼派と松平定信を筆頭とした反田沼派との政権争いの中で大活躍した。彼女は田沼派だったが反田沼派に切り替えして、いわば政治的な運動をした女性である。＜史料２＞は一橋治済が田沼派の横田準松を牽制するために老女大崎と交した文書のひとつである。

行政経験がまったくない松平の老中就任に大きな役割をしたのは、幕閣よりも将軍の側近と大奥の政治力だったのである。しかし、松平は田沼に反して大奥に徹底的な制裁を加えた。大崎とは激しい論争の終りに結局大崎の解任となった。誰よりも彼らの暗黙的な力をよく知っていたはずの松平だから、彼らの頭を抑える必要があったのである。

② 姉小路の場合

姉小路は11代将軍家斉と12代将軍家慶の時期に上臈御年寄として活躍した。彼女は＜史料３＞のように天保改革で倹約令を下す老中水野忠邦に反論し、大奥の奢侈を正当化したことでよく知られている。

彼女はまた、将軍家と大名家の結縁にも参与した。[12]次期将軍になる徳川家定の正室（西簾中）の選り抜きに関与したのである。斉彬は篤姫を念頭に置いて姉小路と相談をする。島津斉彬がその交渉の窓口にした者は表の老中阿部正弘、中奥の奥医者多紀、大奥の姉小路で、畑尚子は篤姫の選り抜きにおいて姉小路の活動が誰よりも重要だったと評価している。[13]

老女の権勢は江戸時代三大改革において大奥が常に改革の対象になったこととも関係がある。表は大奥の奢侈を規制するようにしたが、その奢侈の費用には大奥の政治力を利用するために外部から入って来る請託と賄賂も含まれていた。＜史料４＞から見ると大奥に人事請託を依頼する表からの賄賂がかなり入ってきていたことが分かる。

5．終りに

老女の存在は大奥の成立.変遷の過程で出来た

のである。老女の基本的な勤務は大奥内のすべての取締りで、口上書などの公式文書の発送を通じて、公的位置にいることを対外的に認められた。それだけでなく、様々な活動を通じて彼等の政治力を把握することができた。老女のそのような権力を制裁するために表は各種の規制で大奥を取り締まろうとしたが、彼等の奢侈は結局、表の人事権を狙う外部からの賄賂が原因であった。

以上のように、将軍と格別な関係を持つ大奥の特性と、その大奥におけるすべての事務を管理する老女の影響力は表の役人たちにも見過ごすことができなかったのである。

注

1）既存の研究では御年寄より老女という名称が一般的に広く使っている。
2）永島今四郎、太田贇雄『千代田城大奥』、原書房、1892。
3）三田村鳶魚『御殿女中』、中公文庫、1998。
4）高柳金芳『江戸城大奥の生活』、雄山閣、1981。安西篤子監修『江戸城大奥100話』、立風書房、1989。卜部典子『人物事典　江戸城の女たち』、新人物往来社、1988などかある。
5）竹内誠「大奥女老の政治力」、『図説人物女性の日本史』六、小学館、1980。
6）『幕府禁令考』第三帙　巻二十一。
7）「水戸家文書」、竹内誠「寛政改革」より引用。
8）安西篤子監修『江戸城大奥100話』、立風書房、1989。p.228　参照。
9）山田三川『想古錄』２、東洋文庫　平凡社、1998、p.118
10）『徳川禁令考』前集第三。
11）竹内誠、前掲書、「大奥女老の政治力」。
12）畑尚子、『幕末の大奥』、岩波書店、2007。pp.72~77
13）畑尚子、前掲書、第３章「篤姫から天璋院へ」参照。

参考文献

＜史料＞
『遠近橋』高橋多一郎、続日本史跡協会叢書、東京大学出版社。
『甲子夜話』松浦静山著、中村真幸彦、中野三敏校訂、平凡社。
『旧事諮問録』旧事諮門錄会編　進士慶幹校注、岩波書店、2007。
「女中法度」『徳川禁令考』第三帙　巻之二十一、司法省庶務課編、創文社。
『徳川実記』『新訂増補国史大系』、吉川弘文館。
＜文献＞
安西篤子監修『江戸城大奥100話』、立風書房、1989。
安藤優一浪『江戸城.大奥の秘密』、文藝春秋、2007。
氏家幹人『江戸の女の底力』、世界文化社、2004。
大口勇次男『女性のいる近世』、勁草書房、1995。
女性史總合研究会『日本女性生活史　第３巻　近世』、東京大学出版社、1990。
――――『日本女性史　第３巻　近世』、東京大学出版社、1982。
――――『日本女性の歴史』、角川書店、1990。
近世女性史研究会編『江戸時代の女性たち』、吉川弘文館、1990。
高澤憲治『近世国家の支配構造』、雄山閣出版、1986。
高柳金芳『江戸城大奥の生活』、雄山閣、1981。
藤田 覚『松平定信』、中央公論社、1993。
卜部典子『人物事典 江戸城の女たち』、新人物往来社、1988。
永島今四郎、太田贇雄編　『新装版 定本江戸城大奥』、新人物往来社、1995。
畑尚子『江戸奥女中物語』、講談社＜現代親書＞、2001。
―――『幕末の大奥』、岩波書店<岩波親書＞、2007。
―――『徳川政權下の大奥と奥女中』、岩波書店、2009。
平井聖『図説江戸１江戸城と将軍の暮らし』、学習研究社、2000。
深井雅海『図解江戸城を讀む　大奥中奥表』、原書房、1997。
三田村鳶魚『御殿女中』―鳶魚江戸文庫17、中公文庫、1998。
山田三川『想古錄』１、２、東洋文庫、平凡社、1998。
山本博文『将軍と大奥 ―江戸城の「事件と暮らし」』、小學館、2007。
――――『大奥学事始め―女のネットワークと力』、日本放送出版協會、2008。
竹内誠「大奥女老の政治力」、『図説人物女性の日本史』六、小学館、1980。
竹内 誠「寛政改革」、『岩波講座日本歴史12巻　近世４』岩波書店) 1976